

十勝海岸湖沼群の自然調査

一般社団法人湿原研究所

十勝海岸湖沼群は、十勝海岸に並ぶ 4 つのラグーンを中心に広がる湿原地帯で、生物多様性の宝石のような景色が広がっているが、調査の空白地帯と言われ、周辺酪農業等の影響による湖水域の水質汚染や、湿原の開発行為等が懸念されている。

2010 年 9 月、十勝海岸湖沼群がラムサール条約湿地潜在候補地に選定され、一般社団法人湿原研究所は、この地域の自然調査と保全・利活用の研究のため、2012 年に設立された。活動は会員の年会費で支えられているが、この度の「前田一步園財団自然保全活動助成」により、多角的な調査研究の計画に着手することができた。

初年度である平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月は、十勝海岸湖沼群の全体を把握することから開始。基礎的なフィールドワークとともに、内外の研究者や研究機関との連携を進め、研究会の積み重ねに力を注いだ。

具体的には、まず「タイキ・フローラ」と命名した地元住民による植物調査グループが、一年間、定期的に自然調査を行った。観測地点を絞りに(大樹町当縁・晩成)、植物観察、同定、標本作成などを専門家の指導のもとに行った。タイキ・フローラのメンバーは皆、大樹町に咲く貴重種への興味で参加したのだが、視野が広がるにつれ、単に野の花を愛でるだけの散策より、自然保全を目的とした調査が面白くなり、自ら考え提案もしつつ参加してくれるようになった。

また、研究会を月に二回開催。一つは「柏林講座」という読書会。もう一つは「晩成学舎」という座学と観察会を組み合わせた一泊二日の総合学習交流講座。どちらも一流の講師を招き、自然に係る世界を広く楽しく学んでいる。晩成学舎特別講座では、森の巨人・宮脇昭氏の集中講義「生態学とは何か」を行った。日本全国から年齢も職業もさまざまな人々が参加し、ほぼ全員が発言。大きな拍手と笑顔で閉幕した。

一方、地元農林水産業や商工に関わる人々と交流を続け、連携する農業者とは、自然保全型酪農の研究も開始した。年度の終わりには、道内全域の自然調査専門家のネットワーク作りを行った。

このように、情報発信や研究会を積み重ね、人々との連携に力を注いだ結果、初年度ながら予想以上の目的達成ができ、多くの協力が得られた。この事業の今年の成果は、地元商工会会長の、次のひと言に集約されていると思う——「自然環境と経済は、両立するよう計画する時代だ」。

手を差しのべて下さった前田一步園財団のご支援に、心から感謝申し上げます。



